礼拝説教（2026 年９月 27 日）

説教者：中村信哉

さあ、ここから行くのです

ヨハネの福音書 14 章 22-31 節

はじめに

イエス様は、十字架で死なれる前夜の「最後の晩餐」の時、もう間もなくすると、ご自分は、弟子たちのもとを去って、父なる神様のもとに行かれると言われました。そこで、今日の聖書箇所では、**「イスカリオテでないほうのユダ」**がイエス様にこう尋ねるのです。**「主よ。私たちにはご自分を現わそうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか」**。イエス様の弟子には、「ユダ」という名前の弟子が二人いました。一人は、有名なイエス様を裏切る「イスカリオテのユダ」で、もう一人が今日の聖書箇所に出てくる「イスカリオテでないほうのユダ」ですが、他の聖書箇所を見ると、この人は**「ヤコブの子ユダ」（ルカ 6：16、使徒 1：13）**と呼ばれています。この人は、「イスカリオテのユダ」に比べると、ほとんど知られていません。イエス様の弟子の「ユダ」と言えば、誰もがまず「イスカリオテのユダ」を思い浮かべるでしょう。しかし今日の聖書箇所でイエス様は、この「ヤコブの子ユダ」の言葉をきっかけに、大切な真理を語っていかれるのです。

1. イエスを愛する人

23-24 節で、イエス様はこう言われます。**「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです」**。イエス様を愛する人は、イエス様のことばを守るようになります。私たちは、目に見えないイエス様に、どのように愛を表現したらよいでしょうか。私たちは、イエス様のことばを守ることによって、イエス様への愛を表現するのです。「ことばを守る」と聞くと、非常に戒律的で堅苦しく感じるかもしれません。しかしⅠヨハネ５：３で、ヨハネはこう言っています。**「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません」**。ヨハネは、「神の命令は重荷とはならない」と言っています。それは、神様への愛から出ているからです。神様の愛と恵みに対する感謝から出ているからです。私たちは、神様に愛されるために、神様の命令を守るのではありません。神様に捨てられないために、神様に救われるために、神様の命令を守るのでもありません。神様に愛されたからこそ、神様に救われたからこそ、感謝と愛を込めて、神様の命令を守っていくのです。ですから、神様の命令は重荷とはならないのです。イエス様を愛する人も、イエス様への感謝と愛を込めて、喜んで、心からイエス様のことばを守るようになるのです。

では、「イエス様のことば」とは、何を意味するのでしょうか。イエス様は、14：15 でもこう言われました。**「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」**。また 14：21 でも、**「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です」**。ここでは、「わたしのことば」ではなく、「わたしの戒め」と言い換えられています。ですから、「イエス様のことば」とは、「イエス様の戒め」のことだと考えられます。では、「イエス様の戒め」とは何でしょうか。それは、13：34 に出てくる「新しい戒め」のことだと思います。イエス様は、こう言われました。**「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」**。イエス様が愛されたように、互いに愛し合うこと、それが「イエス様の戒め」であり、「イエス様のことば」だと思うのです。イエス様を愛する人は、イエス様が愛されたように、互いに愛し合うようになるはずだということだと思います。ですから、イエス様を愛しているけれど、人を愛さないということはあり得ないことです。人を愛さない人は、イエス様のことも愛していないのです。イエス様を信じるクリスチャンは、必ず教会の交わりに加わるはずです。「私は個人的にクリスチャンとして生きていく」とか、「私は個人的に礼拝しています」というのは、本来あり得ないことです。もちろん様々な事情で、教会の交わりに加われない、礼拝に集えないということもあると思いますが、イエス様は、教会の交わりの中で、御自身への愛を表すことを求めておられるのだと思います。

そして、イエス様はこう言われます。**「そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます」**。イエス様を愛し、イエス様のことばを守る人は、父なる神様に愛されます。しかし、それだけではありません。イエス様は「わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます」と言われます。ここに、「わたしたち」とあります。イエス様が、私たちと共におられ、私たちのうちにおられるだけでなく、父なる神様も、私たちと共におられ、私たちのうちにおられるのです。旧約聖書でも、父なる神様は語っておられました。**「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから」(イザヤ 41：10)**。この父なる神様が、イエス様のことばを守る人を愛し、その人と共に、その人のうちにいてくださるのです。イエス様を愛し、イエス様のことばを守る人のうちには、父、子、聖霊の三位一体の神様がともにおられるのです。

2. <u>思い起こさせてくださる助け主</u>

さて、続いてイエス様は、26 節でこう言われます。**「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」**。イエス様は 23-24 節で、イエス様を愛し、イエス様のことばを守る人のうちには、父なる神様とイエス様が共におられると言われました。では、聖霊とはどういうお方でしょうか。聖霊は、私たちにすべてのことを教え、イエス様が話したすべてのことを思い起こさせてくださる方です。

2：22 には、**「イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言わ**

れたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた」とあります。また 12：16 には、**「これらのことは、初め弟子たちには分からなかった。しかし、イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした」**とあります。弟子たちは、イエス様が地上の生涯で話されたことの意味を、十分に理解できなかったのです。しかしイエス様が十字架で死なれ、三日目によみがえり、天に昇られて聖霊が弟子たちに与えられた時、弟子たちは、イエス様のことばを思い起こし、その意味を理解するようになったのです。イエス様が語られたことばの意味は、こういうことだったのか、と「分かった」ということです。

私たちの心に、聖書の言葉の意味は、こういうことだったのか、と「分かった」という思いを与えてくださるのが、聖霊というお方です。ある人は、「ストンと心に落ちた」と表現するかもしれません。今まで礼拝でずっと聖書の話を聞いてきたけれど、よく分からなかった、でもある時、こういうことだったのか、と「分かる」時が来るのです。まるで自分のことを語っているように思えるようになった、という時が来るのです。それこそ、聖霊の働きです。そして聖霊は、私たちをイエス様への信仰に導いてくださるのです。聖書は、聖霊に導かれた人々が書いた「神の言葉」です。ですから、聖霊によらなければ、私たちはこの言葉を理解することも、信じることもできないのです。

3. <u>イエスの平安</u>

さて、さらにイエス様は、27 節でこう言われます。**「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません」**。イエス様は、私たちに平安を与えてくださいます。イエス様が与えてくださる平安は、この世が与えるようなものではありません。この世は確かに、私たちに安らぎを与えてくれます。疲れた時には休息を与えてくれます。病気になった時には癒しを与えてくれます。落ち込んだ時には、友人が励ましたり、慰めたりしてくれます。しかし、私たち人間が根本的に求めているのは、死に対する平安ではないでしょうか。私たち人間が、根本的に抱えている不安は、死に対する恐怖ではないでしょうか。ヘブル 2：14-15 には、こうあります。**「子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者を、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした」**。悪魔は、アダムとエバを誘惑し、私たち人間に死をもたらし、私たち人間を死の恐怖で縛り付けました。私たち人間は皆、一生涯、死の恐怖に怯え、死の奴隷として生きています。この世は、あらゆる安らぎを与えてくれます。しかし、死の恐怖を乗り越える平安を与えてくれません。イエス様が与えくださる平安は、死の恐怖を乗り越える平安です。イエス様はそのために、十字架で死なれ、死からよみがえり、私たちに天国への道を開いてくださったのです。イエス様は、十字架の死によって悪魔の力を滅ぼされました。そして、三日目に死からよみがえり、死の力を滅ぼされました。そして天に昇られ、イエス様を信じる私たちを待っていてく

ださるのです。

おわりに

イエス様は、「あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません」と言われます。イエス様は、弟子たちのもとを去り、父なる神様のもとに行かれます。そして今も、天におられます。しかしイエス様は、イエス様のことばを守り、イエス様を愛する人のうちに、共におられると言われます。イエス様だけでなく、父なる神様も、私たちのうちに、共におられると言われます。そして聖霊は、イエス様のことばを、私たちに教え、思い起こさせてくださると言われます。イエス様は、何のために弟子たちのもとを去り、父なる神様のもとに行かれるのか。それは、十字架の死と復活によって、悪魔と死の力を滅ぼし、私たちを死の恐怖から解き放ち、死を乗り越える平安を与えるためです。

ヤコブの子ユダは、「主よ。私たちにはご自分を現わそうとなさるのに、世にはそうなさないのは、どうしてですか」と尋ねました。イエス様が弟子たちにだけご自身を現わし、世には現わさないのは、弟子たちを通して、世にご自身を現わそうとしておられるからではないでしょうか。また私たちを通して、世にご自身を現わそうとしてられるからではないでしょうか。だからこそイエス様は、31 節で、「立ちなさい。さあ、ここから行くのです」と言われるのです。私たちは、この世の中にイエス様を現していくのです。この世の中に、死を乗り越える平安が、イエス様のうちにはあるのだと証ししていくのです。

天におられる父なる神様。

あなたは、イエス様のことばを守り、イエス様を愛する人を愛され、その人のうちに共におられます。そして、イエス様をこの世に遣わし、十字架と復活によって、私たちに死を乗り越える平安を与えてくださいました。あなたは、私たちを通して、この世にご自身を現わそうとされます。どうか、聖霊によってイエス様のことばを思い起こさせ、いつでも私たちを立ち上がらせてください。そして、この世へと私たちを遣わしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。